

新潟市南浦原遺跡 範囲等確認調査報告書



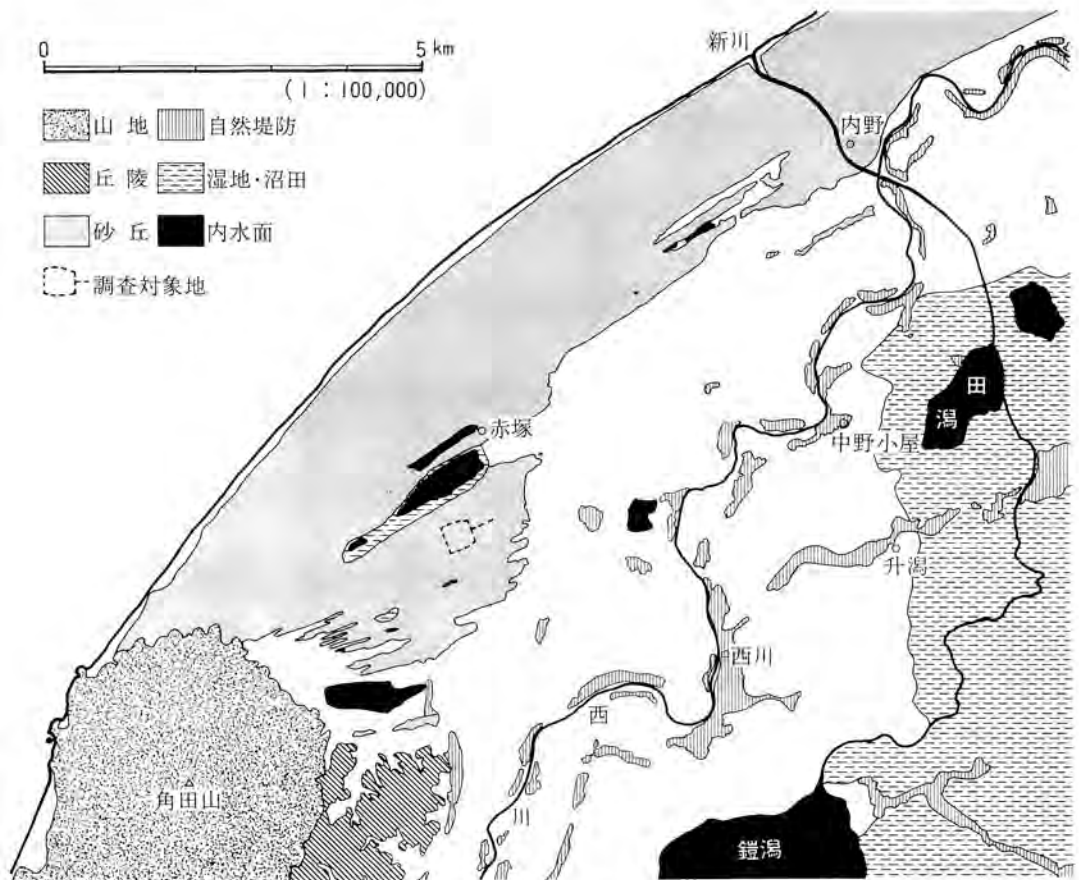
角田山から遺跡(中央)を望む 1987年9月

1989

新潟市教育委員会

例 言

1. 本書は1987年に実施した新潟市赤塚字南浦原ほかに所在する南浦原（みなみうらはら）遺跡の範囲等確認調査の報告書である。
2. 調査は国庫及び県費の補助金交付を受けて、新潟市教育委員会が調査主体となり実施した。調査体制は巻末に記した。
3. 調査で得た資料は、新潟市教育委員会が一括して保管している。遺物の注記は、分布調査で得たものを（KS）、発掘調査で得たものを（KN）としてある。
4. 地図の方位は真北、レベルは標高を示した。遺物の測図と写真は同番号を付し、拓影は縄文土器以外は断面図の右に外面、左に内面を示した。
5. 参考文献は文末に一括して掲げた。
6. 本書は藤塚が執筆し、図版等の作成は梶・渡辺が補助をした。
7. 調査から本書の作成に至るまで、多くの方々・機関から指導・協力を得た。



第1図 地形概念図（新潟古砂丘グループ1974ほかから作図）

I 調査に至る経過

新潟市赤塚地区に社会保険庁による厚生年金スポーツセンター建設計画が具体化したのは、1987年2月である。同地には既存の遺跡は知られていなかったが、周辺に遺跡が濃密に分布しているため、関係機関と協議を行い、新潟県教育委員会及び新潟市教育委員会は、同年3月計画予定地周辺の分布調査を実施した。その結果、計画予定地内に希薄ではあるが縄文・平安・中世の遺物散布が知られたため、同年4月文化財保護法に基づき遺跡発見通知を行うとともに、発掘調査の実施等について関係機関等で協議をすることとなった。

協議の結果、同開発計画予定地内の遺跡の範囲等確認のための発掘調査を緊急に実施することとし、同年の夏作物収穫後、直ちに発掘調査を開始するに至ったものである。なお、協議に基づく調査対象地は、上記建設予定地及び進入道路予定法線全域の約14haである。

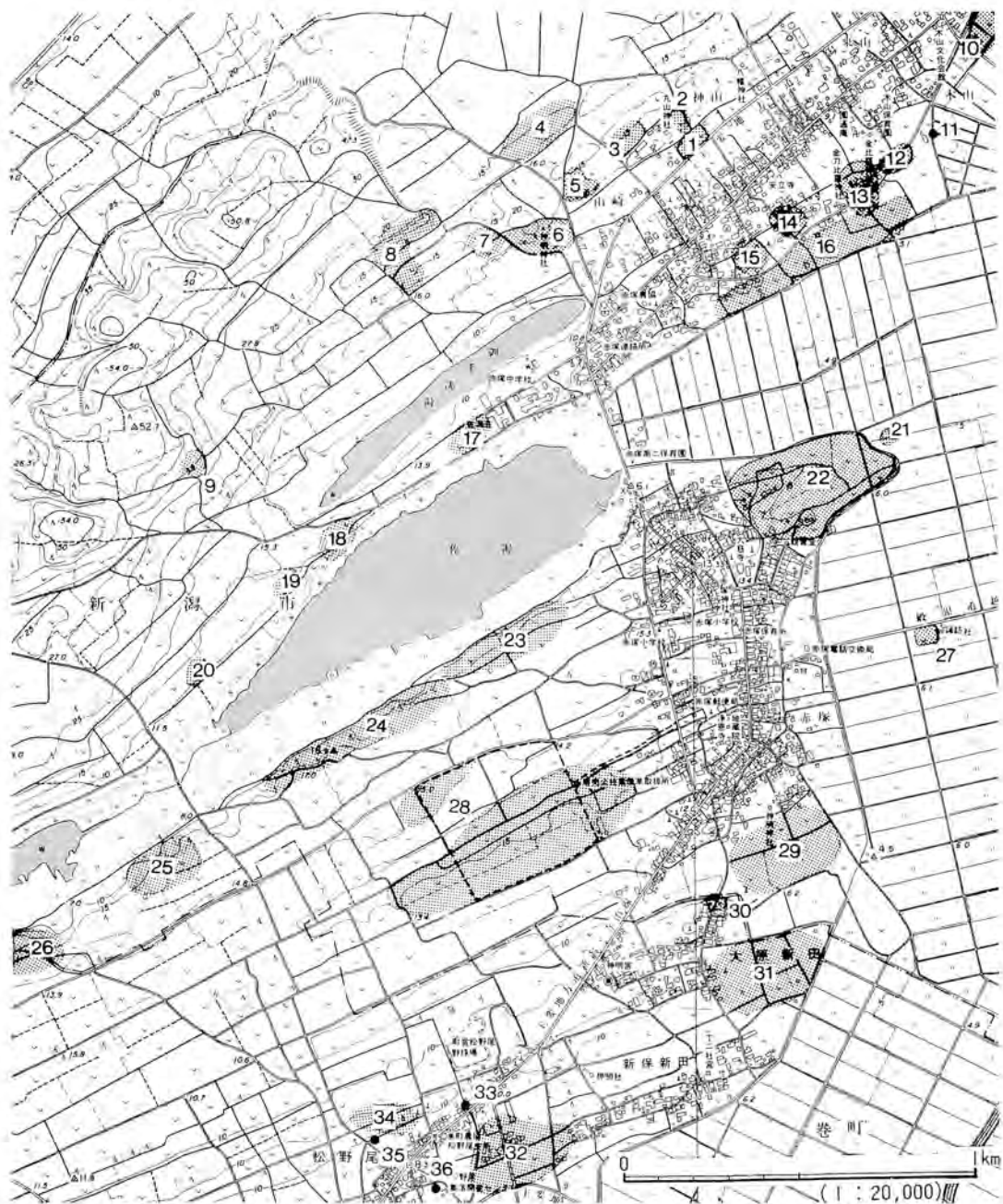
II 遺跡の位置と周辺の環境

1. 位置と周辺の環境

第1図に地形概念、裏表紙に旧版5万分の1地形図を示す。地形図の村落名は市町村合併後、一部改称されている。

遺跡は、佐潟南岸に広がる広大な砂丘地の内部に所在する。この砂丘は海岸線に沿って平行に10列にもわたって走る新潟砂丘の一部で、第1図はその西端部に相当する。同砂丘列はいずれも新砂丘であり、形成された時代等から内陸側より新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3群に大別され、砂丘に立地する遺跡はⅠで縄文時代以降、Ⅱで古墳時代以降、Ⅲで平安時代以降が知られ、さらに群内で細分されている。^(注1)しかし新砂丘Ⅰ・Ⅱは信濃川以西から赤塚周辺までの間連続して確認されておらず、赤塚地区と信濃川以東との対比は必ずしも明らかでない。赤塚周辺では、布目から佐潟の間が新砂丘Ⅰa～Ⅰf、佐潟北岸から山崎・中権寺の間がⅡa～Ⅱd、さらに海岸部までがⅢa～Ⅲcに分類されている。このうち本遺跡の立地する砂丘はⅠb～Ⅰfが接する幅広い砂丘地となっており、信濃川以東のⅠ-4列に対比されるⅠeが本遺跡のある砂丘列である。^(注2)遺跡及びその周囲は砂丘列に平行するN60°E方向の起伏が幾列にも認められ、標高は10～13m程度を計る。砂丘内部に位置し、地下水位も低いため、現在の電動井戸ポンプによる給水施設ができる以前は、運搬以外に水の確保手段はなかったという。また、現海岸線から2.5kmしか離れておらず、風が強いため、飛砂防止ネットがいたるところに設けられている。

一方、本遺跡の所在する砂丘地の周囲は西北部が新砂丘Ⅲに接続しているほかは低湿地に囲まれており、角田山の裾とも直接接していない。この低湿地は新潟平野の一部であり、発達した海岸砂丘に出口を妨げられた河川が蛇行するはんらん原であった。第1図にある新川は江戸文政期に開削された人工流路である。同図では西川沿いに自然堤防が発達し、往時の流勢を物語っている。また、銚子・田潟などを含む湿地帯は推定される古白根潟に相当する。こうした沖積平野の形成については、珪藻分析では、常に淡水性の堆積物が優勢であり、縄文海進時においても、海水の侵入を容易に許さない地理環境が推定されている。^(注3)



No.	遺跡名	時代等	No.	遺跡名	時代等	No.	遺跡名	時代等
1	神山	石鏝・石匙 (33)	13	茶畑	石鏝・土師・須恵 (54)	25	原付	土師・須恵 (103)
2	ツル子C	縄文・土師・近世陶 (77)	14	屋敷森	土師 (51)	26	清水上	土師・須恵 (巻94)
3	ツル子B	土師・近世陶 (76)	15	屋敷浦	弥・古土師・土師・須恵 (50)	27	観音原	磨製石斧 (60)
4	吹荒地	土師・近世陶 (75)	16	前田	土師・須恵・中世陶磁 (53)	28	南浦原	縄文・土師・須恵・中世陶 (108)
5	ツル子A	土師・近世陶 (74)	17	筒院菰	土師 (65)	29	坂田	土師・須恵・中世陶磁 (63)
6	赤塚神明社	須恵器・銭貨(江) (27)	18	上谷内B	土師・須恵 (66)	30	大原	土師・須恵 (巻93)
7	荒所B	土師・須恵 (73)	19	上谷内A	土師 (64)	31	山田屋敷	土師・須恵・中世陶磁・塚 (巻52・104)
8	荒所A	石鏝・石匙・須恵 (2)	20	一沼	土師・須恵・土鏝 (67)	32	下福場	磨石斧・古土師・土師・須恵・中世陶磁 (巻51)
9	石ナゲ山	塚?	21	大蔵塚	塚(中世) (45)	33	奥堂古墓	円形塚(中世和鏡・銭貨) (巻67)
10	木山	中世陶 (42)	22	大蔵	土師・須恵・中世陶磁・塚 (41)	34	代官屋敷	土師 (巻95)
11	——	銭貨 (107)	23	北浦原B	土師・須恵・中世陶磁 (71)	35	兵衛塚	方形塚 (巻73)
12	ヤマサキ	石鏝・石匙・中世陶 (55)	24	北浦原A	縄(中)・土師・須恵・土鏝 (48)	36	浦福地塚	方形塚6基 (巻75-79)

第2図 南浦原遺跡と周辺の遺跡(破線=調査対象地)

()内は市町村遺跡番号

以上のことから本遺跡は、海岸砂丘を隔てて、周囲を淡水域の後背湿地に囲まれた砂丘の内部に位置する遺跡といえよう。

2. 周辺の遺跡

角田山東麓・佐潟周辺には遺跡が集中的に分布する。角田山東麓では古くから報告されている遺跡が多く、佐潟周辺の砂丘上の遺跡は近年多くが知られるようになった。^(注4) ^(注5)しかし佐潟周辺の遺跡については、報告により位置、名称が異なるなど混乱が見られる。第2図はこれらの文献をもとにした周辺の遺跡分布である。なお、図幅中発掘調査された遺跡は興業古墓(33)のみである。

縄文時代 新砂丘Iでは下稲場(32)・観音原(27)の磨製石斧、同IIでは神山(1)・荒所A(8)ヤマサキ(12)・茶畑(13)の石鎌・石匙が知られている。しかし、いずれも併出土器が明らかでなく、所属時期等は不明である。観音原の位置は21の誤認であろうか。出土土器によって時代が明らかな遺跡は北浦原A(24)の縄文中期中葉のみであるが資料数は少ない。なお、新砂丘I a周辺に見られる布目遺跡(図幅外)など前期に遡る遺跡はI b以降の砂丘には認められないとみられている。また新砂丘IIにおける石器の散布は、信濃川以東の同列砂丘の一般的年代観と合致しない。

弥生時代 図幅中、同時代と報告されている遺跡は総て新砂丘IIに位置する。神山ではアメリカ型石鎌があるが土器等は明らかでない。屋敷浦(15)からは楡描波状文・列点文などがあるが資料数は少ない。他にも断片的な資料が認められている模様である。

古墳時代 屋敷浦・北浦原A・下稲場で古式土師器が報告されている。下稲場では、土師器・須恵器の古手のものがあり、奈良・平安に引き続くことも考えられる。また、現存しないが、大慈寺東方の赤塚(22付近)からは明治年間に勾玉・管玉が多数出土し、古墳と報告する文献もある。

奈良・平安時代 遺跡数・遺跡規模・資料数とも増大する。図幅中の大半は同期の遺跡である。特に砂丘縁辺部には大藪(22)・坂田(29)・山田屋敷(31)・下稲場など大規模な遺跡が展開し、図幅中の13~16も一遺跡と見ることができる。また佐潟の周囲にも沼(20)・清水上(26)・北浦原Aなどの資料の多い遺跡が現われる。これらの遺跡は、下稲場を含め9世紀以降の資料が中心である。なお、赤塚神社(6)は、式内社船江神社に比定する説がある。

中世 上記奈良・平安時代遺跡の多くから中世陶器が伴出している。木山(10)・大藪・坂田などは遺物量が多く、遺跡の規模からも有力な遺跡と推定され、やはり砂丘縁辺部を中心に遺跡は展開する。これらの遺跡が平安時代から継続するのかが不明である。また、興業古墓では和鏡・鉦鼓などが出土している。時期は明らかでないが、佐潟周辺には大藪塚(22の内)・山田屋敷塚(31の内)・兵衛塚(35)・浦稲場塚(36)のほか煙滅したものを含めれば多くの塚があり、中世に遡る塚が相当数考えられる。大藪では中世和鏡・懸仏・宝篋印塔・五輪塔などが認められ、寺院址の伝承を残している。^(注6)

以上、本遺跡周辺には縄文時代以降、砂丘縁辺部を中心に遺跡が展開し、平安時代に大規模な遺跡が現れ、中世の遺跡はこの大規模な遺跡の上に認められる傾向がうかがわれるといえよう。

III 遺跡と調査の方法

1. 遺 跡

調査対象地の微地形はN60°Eに走る砂丘列に規制され、東西方向では起伏をほとんど認めず、南北間でゆるい波状の高低差をもつ。現地表面では、中央を走る290～7、270～6トレンチのラインが最も高く、標高13m強を計り、道路はさらに高い。この列の両側は鞍部となり、266～2トレンチのラインで10m程度、275～10トレンチのラインで11m前後となる。さらに南端の道路で再び12m前後の細いピークとなるが、北端の道路付近は13m前後と高くなっても明確なピークをなさない(第2・3図)。道路の段差、畑地間の段差など小規模な地形改変が部分的に認められるが、砂丘列の自然地形をよく示している。

遺物の散布状態は極めて希薄である。近現代の陶磁片とともに、縄文土器・土師器・須恵器・中世陶片などが採集される。248～250トレンチ付近で土師器・須恵器片がややまとまって散布するほかは、特定の傾向を全く認めない。

2. 調査の方法

調査開始時の遺跡は、夏作物であるスイカ・メロン・タバコ等の収穫をほぼ終えた状態であった。しかし、畑作用の給水管が複雑に埋設されており、周辺の畑地の給水に使用されていたため、これの破損を避けながらの調査となった。

調査区の設定は、スポーツセンター予定地内については、砂丘を横断する南北方向に概ね20m間隔のトレンチを想定して行い、中央にメインの168トレンチを設定した。なお、163～166トレンチは、「無縁塚」「明治十二年十月九日 浄恩寺廿三世住建」と刻銘のある墓石が北向きに1墓建てられていたため設定したもので、墓石は現地調査終了後赤塚浄恩寺に改葬されたが、骨蔵器等は認められなかった。進入道路予定地内については、278～290の任意のトレンチを設定した。168・239・252・249・250・265トレンチを除けば各トレンチとも幅員2m、長さ5～10mである。トレンチの配置は、作付や給水管などにより必ずしも整然としたものではない。

発掘は、一部を除き0.4m²級のバックホーを使用し、2班に別れて行った。1班の構成は、調査員2名、作業員5名、バックホー1台を基本とした。トレンチ番号は、作付等の都合で順次に発掘できなかったため、班別に発掘順の仮番号を付し、整理時に通しの一連番号に改めた。

レベルは、赤塚神社脇の水準点(標高13.33m)から276トレンチ北の道路上にレベル移動してベンチマークとした。また、調査面積が広く、3m前後の波状の起伏が通っているため、調査対象地の周囲、進入道路上などに補点を設けて計測した。

現地調査は、後述のように、遺構・遺物包含層とも検出されなかったため、順調に進行し当初予定より早く終了した。現地事務所設置8月11日、発掘開始同18日、埋め戻し完了9月30日、実質発掘面積は約4,300m²である。

IV 調査の結果

1. 層 序



第3図 調査区の設定

第4図に砂丘列ピークを縦断する東西方向、第5図に砂丘列を横断する南北方向の層序関係を示す。基本層序は以下の6層に識別される。

I層 表土 耕土及び客土層である。耕土は砂、粘質土の攪拌層である。40cm程度と厚く、下部は固くしまっている。ほぼ明褐色を呈すが、場所によって砂粒が勝る所があり、色調も下層に順じて異なる。保水、土壌改良などで、人為的に作られた層である。耕土下に、客土を認める所がかなりある。客土層は場所によって異なり一様ではない。I層中に土師器・須恵器・中世近世近現代陶磁片が希に認められる。分布調査で注意された248～250トレンチ付近の散布範囲は、その部分の客土層が斜面中に露出していたためである。

II層 黒褐色砂質土 I層と俊別される。IV層が落ち込む部分に概ねIII層を伴って見られる。南北方向ではIV層の落ち込みに従いレンズ状に観察されるが、東西方向では帯状に観察される。168トレンチでは7ヵ所認められ、同トレンチの東西延長上の各トレンチ相当部でも同層が確認される。腐植質で粘性があり、部分的に粘質土をブロック状に含む。保水性がある。

III層 茶褐色砂 II層と明確に別れる。同層の堆積状態はII層と同様であるが、より広く認められる傾向がある。相対的にII層より薄く、厚い部分ではシミを認めるところもある。

IV層 暗褐色砂 いわゆる黒褐色腐植砂層で、濃い色調である。III層とは漸移的である。168トレンチでは同層が欠除する部分が8ヵ所あり、東西延長上の各トレンチ相当部も同様である。欠除部分の多くは削平によるものと思われる。層厚は安定した部分では40～50cmと厚い。

V層 黄褐色砂 いわゆる腐植砂層下の漸移層である。168トレンチでは、1ヵ所同層が欠除する部分がある。安定した層厚を保つ。またII・IIIが認められるIV層の落ち込み部分では、厚くなる傾向があり、この部分では特有のブロック状のシミが観察され、168トレンチ南端から60m付近では著しい。

VI層 黄灰色砂 いわゆる白砂層である。252トレンチ横(標高10,335m)で試みに地表下3m掘り下げたが、漸移的に青灰色の色調となり、間層等を認めなかった。

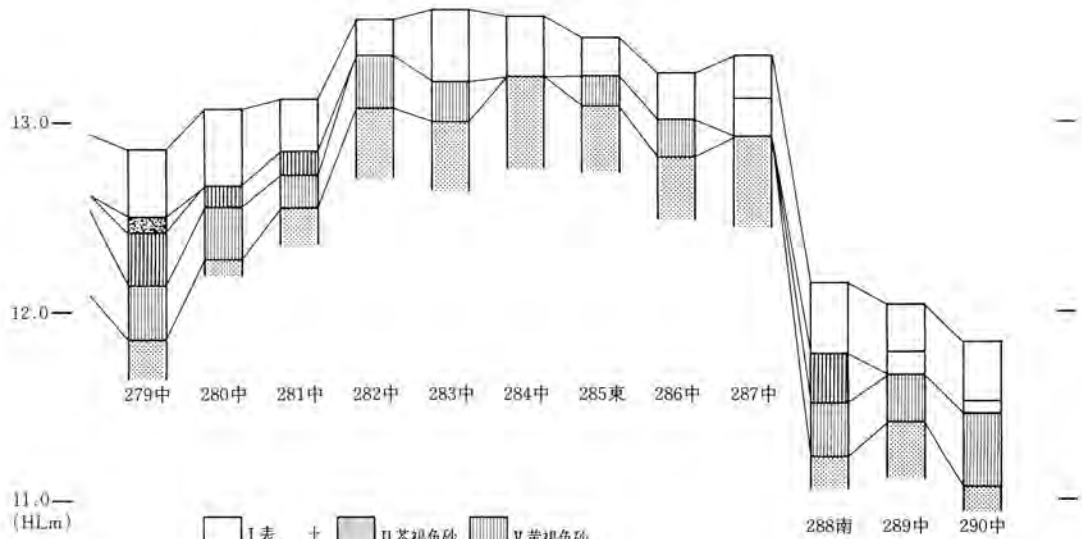
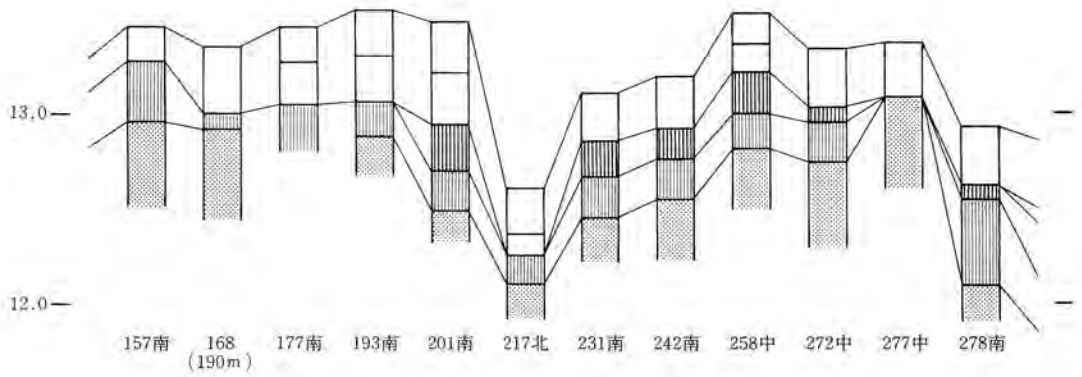
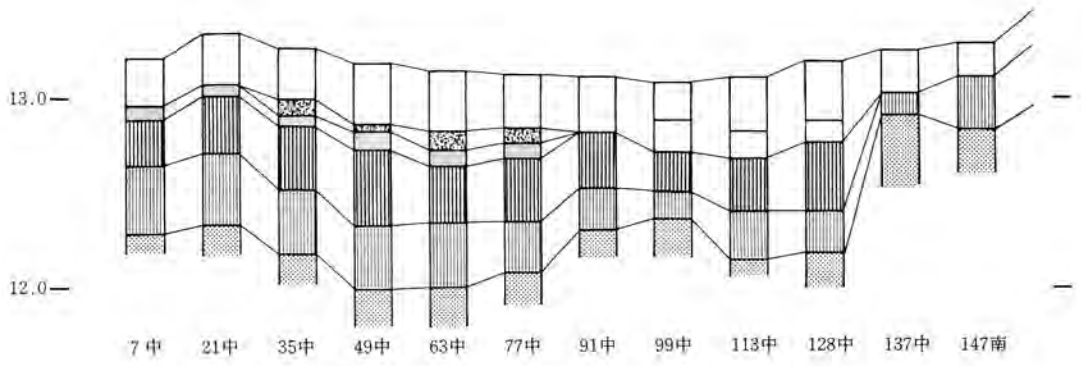
次に、調査対象地における層序関係等の概要を記す。

1. 砂丘形成後の安定した砂丘表面層と考えられるIV層は、南北間で分断されて観察されるが、上下関係を示す部分や交差する部分はない。同層下のV層が安定して連続して認められることから、IV層は同一時期に形成された一枚の腐植層と考えられ、幅の広い砂丘と想定される。

2. IV・V層の欠除部分は削平ないし風触によるものと思われる。この欠除部分は、現地表面の波状の高低差と同じ方向であるが、一層細かい。仮りに調査対象地の北側道路、中央進入道路延長上、南側道路の3列を大きな波頂とすれば、IV層の欠除部分などで復元される小さな波頂は10列を数える。

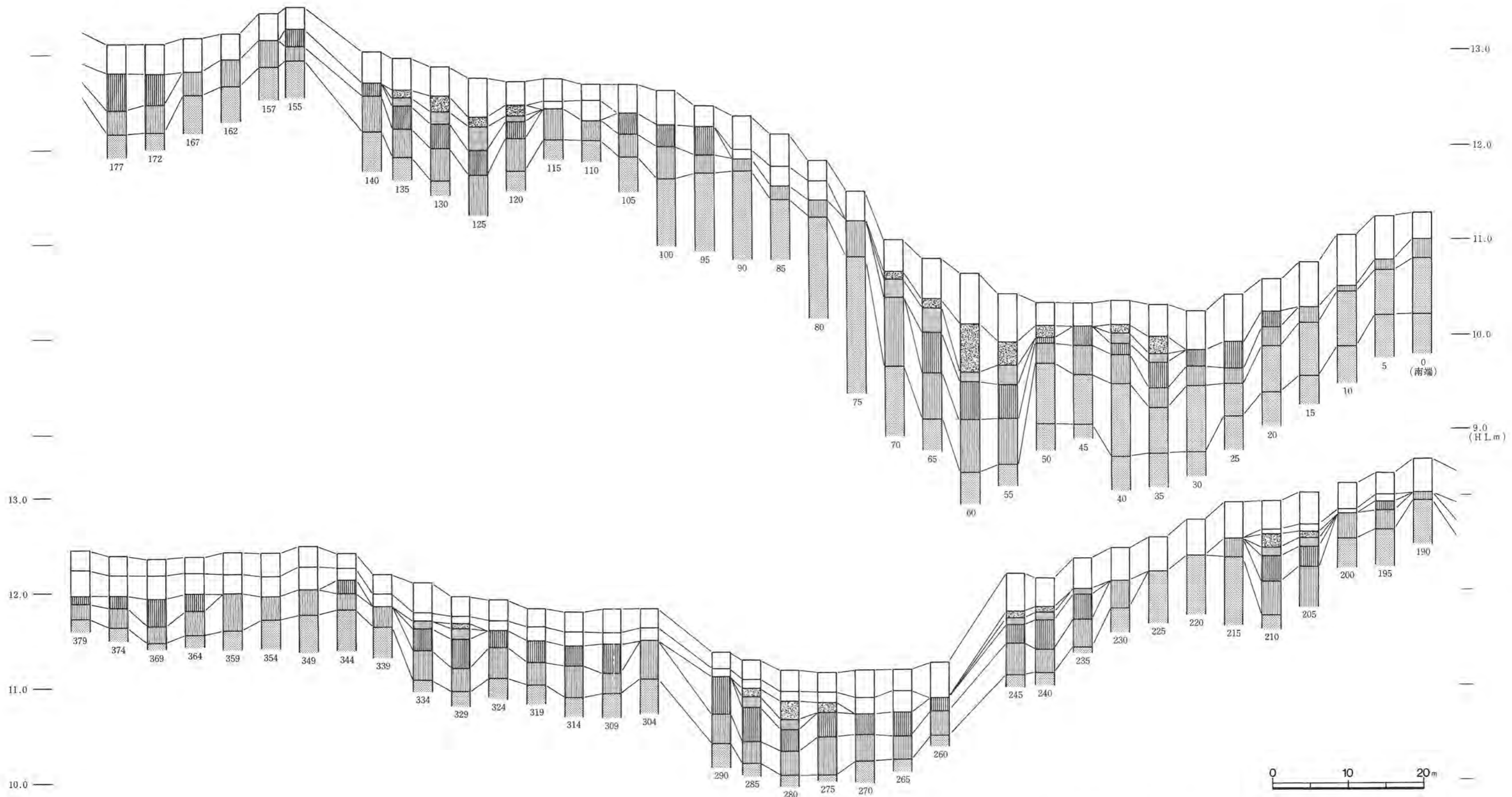
3. II・III層は、この小さな波頂間の窪地に南北レンズ状、東西帯状に観察される。大小の差はあるが、いずれも同様の堆積状態・層質を持つことから、同様の自然条件下で形成されたものと考えられる。窪地の溜り場などが想定される。

4. 上記2・3の起伏した層序関係は東西方向に細長く並列して認められる。しかし、東西方向に延々と続くものではなく、同方向上のゆるやかな起伏に従い認められる。



-
 I表土
-
 II茶褐色砂
-
 V黄褐色砂
-
 III黑褐色砂質土
-
 IV暗褐色砂
-
 VI黄灰色砂

第4図 東西方向土層柱状図 (柱状図下にトレンチ番号・部位を示す。トレンチの間隔は不同。)



第5図 168トレンチ土層柱状図
 (柱状図下に南端からの距離 = m を示す。)

5. I層は、上記の小さな起伏に従い、削平や客土を伴って形成されたもので、純粋な自然層とは認められない。削平の例では、168トレンチ南から220m付近、客土の例では257トレンチの耕土下に客土を5層認めるものなどが典型である。これらの行為によって、現地表面は大きくなだらかな起伏になったものと言える。

2 遺構

近世以前と確認できる遺構は検出されなかった。108トレンチでは断面形が幅91・深さ58cmの方形、248トレンチでは平面形幅150・長さ90cm以上の方形の遺構が確認された。いずれも客土より掘り込まれ、客土と同質土で一次に埋土されている。遺物等は含まず、性格も不明である。

なお、長イモ等の作物によると思われる耕土の小さな落ち込みが各所で認められた。

3 遺物

分布調査及び発掘調査で得た遺物は総数240点と極めて微量であり、総て細片である。このうち分布調査で得た資料が過半を占める。発掘調査の遺物は総てI層中からの出土で、古代～近現代の遺物が混在しており、純粋な包含層はない。平面分布・層位分布いずれも同時性・原位置性が認められないため一括して記す(第6図、写真5～9)。

・縄文土器(1) 1点のみである。方向の一定しない斜縄文と磨消縄文が沈線で画される。外面明赤褐色、内面黒色で焼成は良い。中期後葉から後期前葉と思われる。

・須恵器(2～6) 甕1、杯蓋3、杯7、杯身杯蓋不詳1の12点ある。杯底部は3点あり、底部回転ヘラ切りである。杯はいずれも薄手のつくりで、ロクロなで痕を有す。

・土師器(7～19) 28点ある。甕が大半で、7は口端、9～12は頸部付近であり、口頸部にはロクロ調整痕がある。なお図示できないが、赤彩された古墳時代の疑いがある細片が1点ある。

・珠洲焼(20～28) 10点ある。20は鉢などの口端で端面は内傾する。21は壺の肩、22は磨耗しているが内面に播鉢のおろし目が認められる。他は叩き目を持つ壺甕の体部片である。

・陶器(35～45) 76点ある。時期等不明であり、近現代のものが相当数含まれる。29～33は播鉢で無釉。34も無釉で外面にススが付着し内実の脚を持つ。ホーロクの類であろう。35～45は施釉陶器である。このうち40の内面には砂目状、41の内面には胎土状の付着痕がある。また、41の外面にはススが付着している。37は現代のグイ飲みと区別できない。43～45は灯明器で、鉄釉が施されている。釉薬による文様は三島手などがある。

・磁器(46) 65点ある。これも時期等不明であり、近現代のものが相当数含まれる。染付が過半を占め、その文様は簡略化されたものが大半である(写真9)。46は青白磁で、蛇ノ目凹高台をもち、内面には花卉が施されている。写真左上2点は青磁で、左端は高台が高く内面に花卉を施す。同右端は青白磁で見込内面蛇ノ目釉剥ぎである。

・土師質土器 40点ある。いずれも細片で器形等がわかるものはない。土師器より硬質の焼成で、赤褐色ないし、淡褐色を呈す。時期等不明である。うち1点を写真5で示す。把手か脚であろう。

・不明土器(47～49) 47は丸く肥厚した口端を持つ灰褐色の厚手の土器である。焼成は軟質で

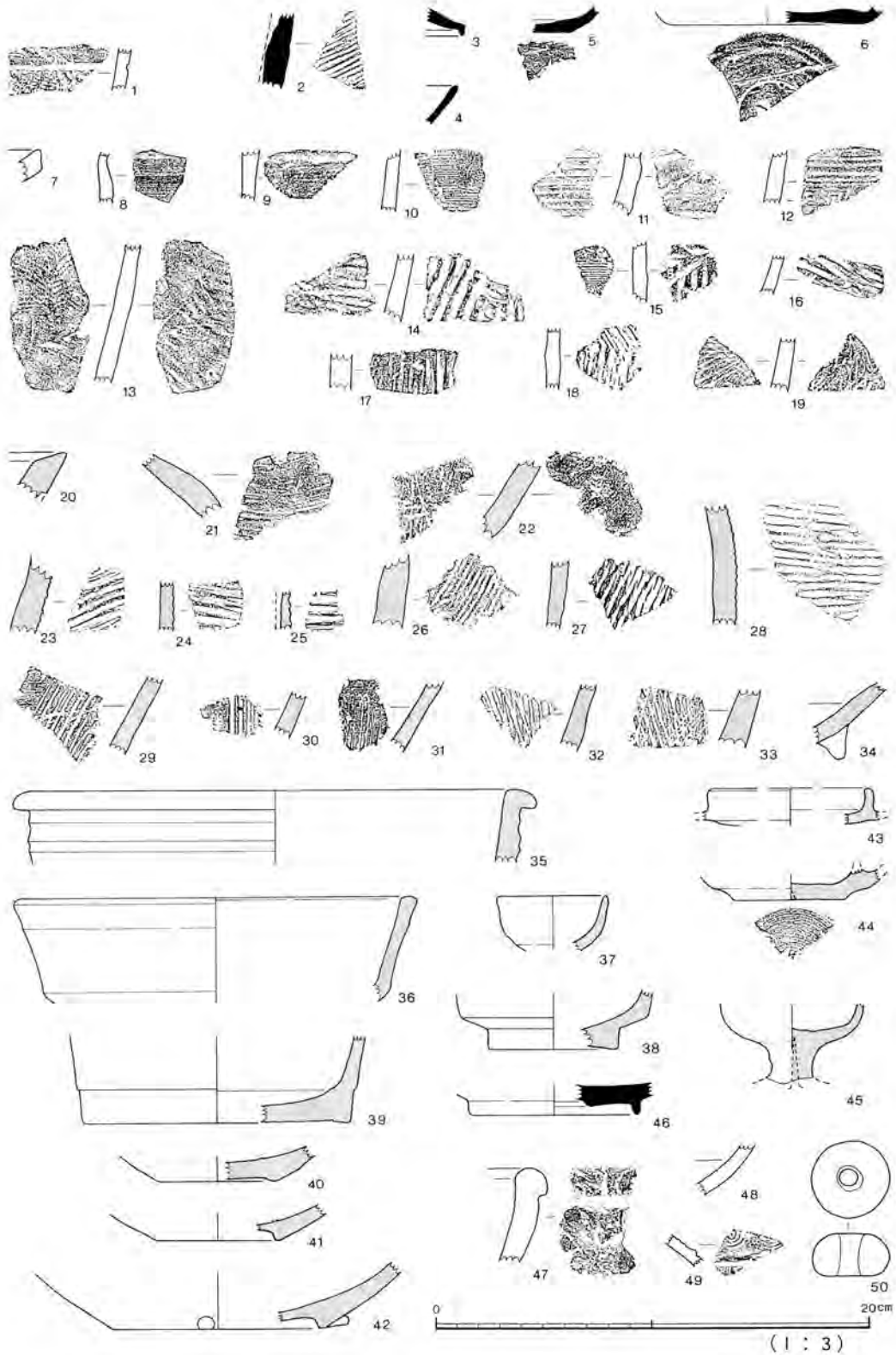
ある。48は内外面黒色を呈す椀類と思われる土器である。内外面ともよく研磨され、胎土は緻密。断面も黒色を呈す。瓦器の系統であろうか。49は外面にスタンプ状工具によると思われる文様、内面にロクロなどで痕を持つ無釉の土器である。以上3点は他の土器と異質であり、時期等も不明。
・その他 土錘と思われる土製品が1点ある(50)。偏平な形をし、赤褐色であり、焼成は土師器より硬質である。近世以降のものであろう。他にガラスオハジキ、鉄片などがある。

V ま と め

南浦原遺跡の発掘調査は開発計画に伴う分布調査によって遺物の散布が知られたため、緊急に実施されたものである。その結果、自然層中には純粋な遺物包含層・遺構を認めず、調査対象地内にそれらの存在を予見できるような所見も得られなかった。表土中に見られる遺物は周辺の遺跡から土砂などとともに持ち込まれたものであろうが、特定できない。恐らく、かなりの遺跡から持ち込まれたものであろうし、その遺物の散布は今回の調査対象地を超える畑地一帯に広がっているものと思われる。佐潟周辺の砂丘遺跡は、砂丘縁辺部に良好な状態と予想される遺跡が集中して見られるが、砂丘内部の遺跡については未だに不明なものが多く、その位置すらも特定できないものも存在する。この度の調査結果は、砂丘内部に所在する遺跡の評価の困難性を改めて認識させたものといえよう。

(注)

- 1 新潟古砂丘グループ 「新潟砂丘と人類遺跡——新潟砂丘の形成史 I——」 『第四紀研究』13-2 第四紀学会 1974
- 2 坂井陽一 「新潟市佐潟周辺に分布する新潟砂丘砂——新潟砂丘の形成について(その2)——」 『研究報告』54 新潟県教育センター 1982
- 3 新潟珪藻グループ 「平野の地下」 『アーバンクボタ』17 久保田鉄工株式会社 1979
- 4 斉藤秀平 「新潟県に於ける石器時代遺蹟調査報告書」 新潟県 1937
真島衛 「西蒲原郡内遺跡地名表」 兎 真島衛 1954
上原甲子郎 「弥彦角田山周辺古文化遺跡概観」 『弥彦角田山周辺総合調査報告書』 新潟県教育委員会 1956
- 5 山口栄一 「巻町の砂丘上の遺跡(一)・(二)」 『まきの木』9・10 巻町郷土資料館友の会 1980
甘粕健ほか 「大沢遺跡——B・B'地区の調査概報——」 巻町・潟東村教育委員会 1981
酒井和男 「新潟市赤塚地区の遺跡と遺物について」 『昭和55年度新潟市文化財調査報告書』 新潟市教育委員会社会教育課 1981
酒井和男 「赤塚地区の遺跡と遺物について(補遺)」 『昭和56年度新潟市文化財調査報告書』 新潟市教育委員会社会教育課 1982
新潟大学考古学研究部 『フィールドノート』1・2・3・4 新潟大学考古学研究部 1982・1883・1984・1986
- 6 並松景政 「大藪遺跡の紹介」 『越後赤塚』6 赤塚郷土研究会 1987



第6图 遺物実測図



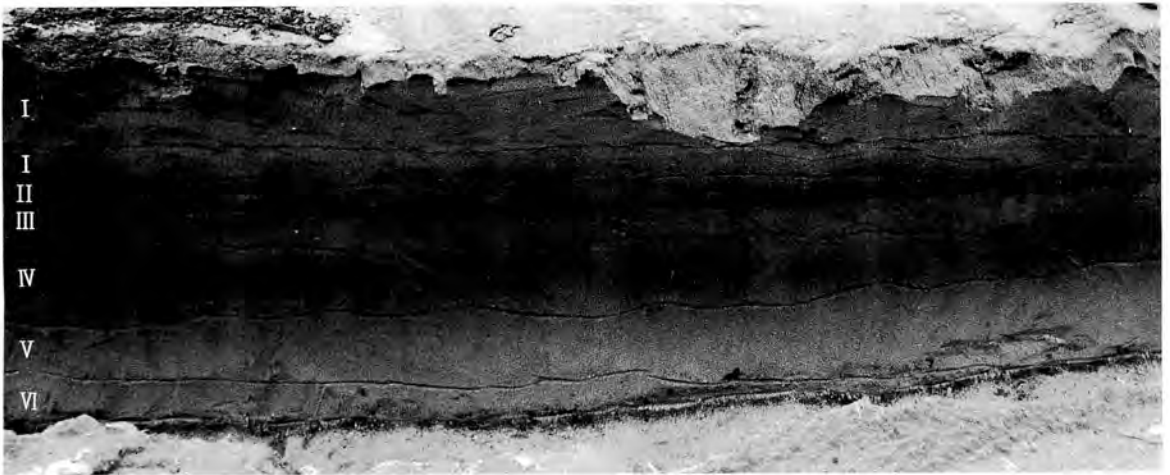
1 遺跡近景 (279トレンチ付近から西側を望む)



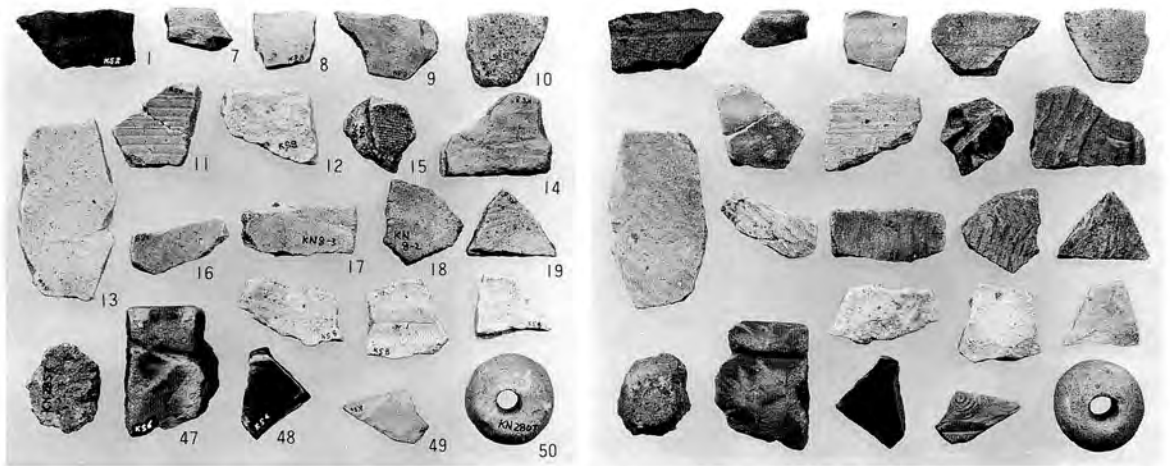
2 発掘風景 (南側道路から248、250トレンチを東北方向に見る)



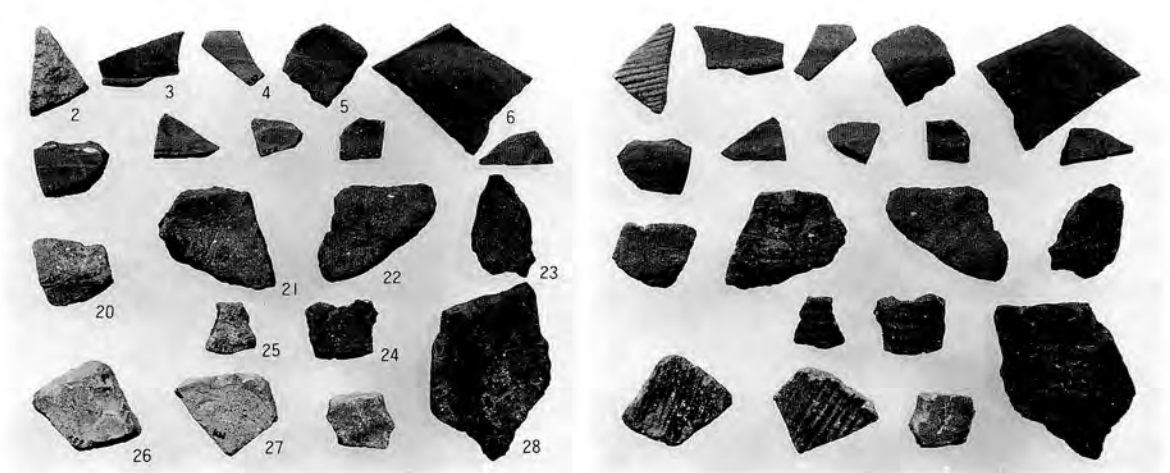
3 トレンチ発掘状態 (168トレンチ南端から245m地点より、同トレンチ南方を見る)



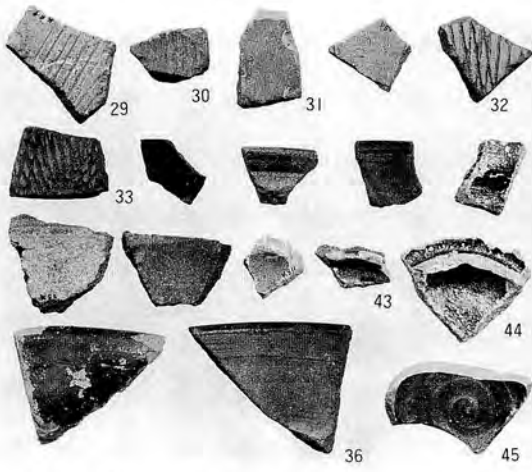
4 基本層序 (168トレンチ南端から210m付近)



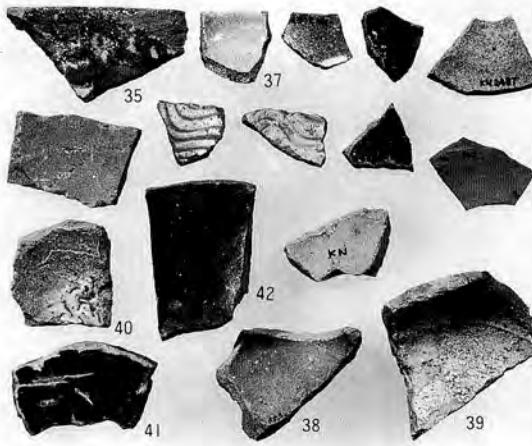
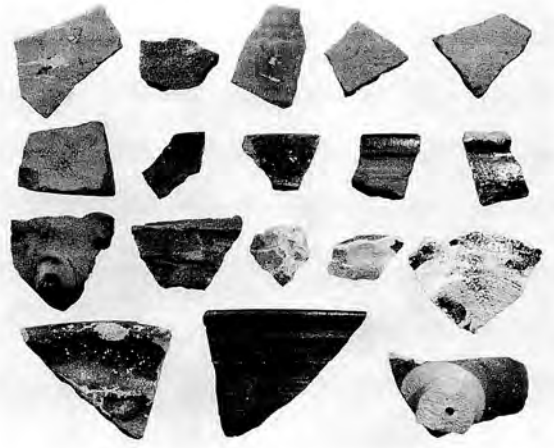
5 遺物 1 (上段左端縄文土器、上4段土師器、下段左端土師質土器、下段中3点不明土器、下段右端土錘)
S=1/2 左内面、右外面 (以下同じ)



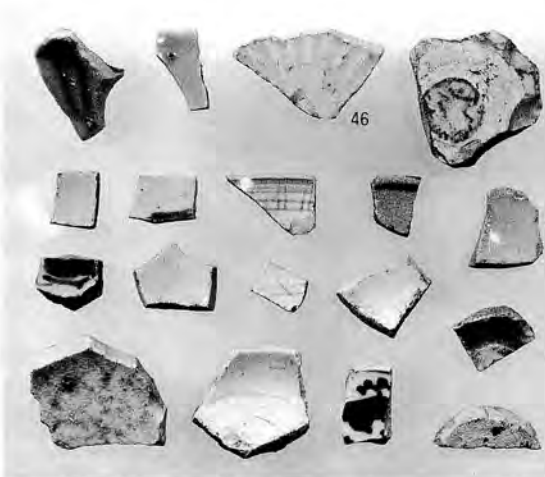
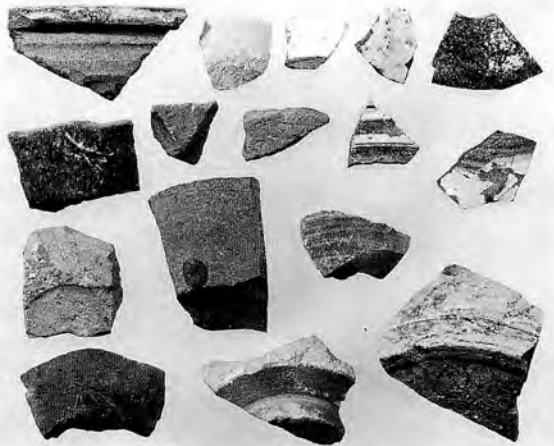
6 遺物 2 (上2段須恵器、下3段珠洲焼)



7 遺物 3 (陶器)



8 遺物 4 (陶器)



9 遺物 5 (磁器)

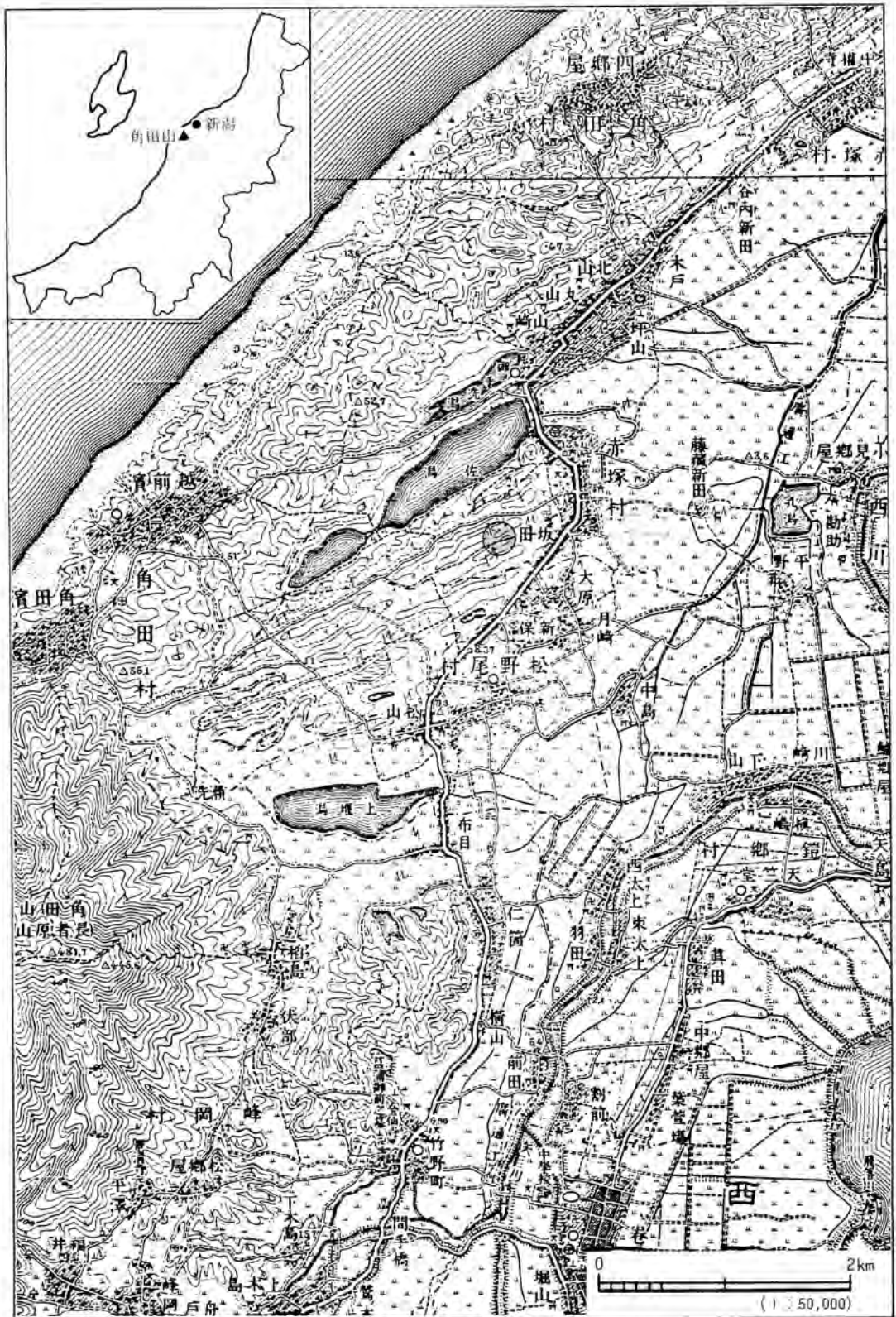


調 査 体 制 等

調査主体 新潟市教育委員会（教育長 寺崎哲夫、教育次長 丸山哲男）
総括 鈴木忠（社会教育課長）、伊藤具視（社会教育課長補佐）
調査担当 藤塚明（社会教育課主事）
調査員 坂井陽一（新潟江南高校教諭）、前谷達也（社会教育課主事）、小池邦明（同主事補）、渡辺朋和（同囀託）、梶良成（同）
事務 松岡道彦（社会教育課主事）、熊谷博純（同）
調査作業 浅倉サヨ、飯田キク、小池真弓、斉藤葉子、真田カズイ、真田和子、鈴木節子、戸根富美江、中野訓市、中野茂男、渡辺弘二
協力 赤塚連合自治会 新潟江南高校 新潟大学考古学研究部 新潟県教育庁文化行政課 新潟市土地開発公社 戸根与八郎 各地権者ほか

新 潟 市 南 浦 原 遺 跡 範 囲 等 確 認 調 査 報 告 書

発行日 1989年1月26日
発行 新潟市教育委員会
新潟市一番堀通町3番地12
〒951 TEL. (025)228-1000
印刷 太陽印刷所
新潟市和合町2丁目4番18号
〒950 TEL. (025)265-3101



遺跡位置図 大日本帝国陸地測量部 大正3年「内野」跡彦